

私のコメント

永谷 清

宇野の理論は、ロシア革命以降、世界史は社会主義への移行期に入ったという歴史認識のもとに形成されている。しかし旧社会主義国は崩壊した。また宇野の死後、IT 技術の発展や資本主義のグローバル化など、宇野が経験できなかった歴史の新らたな展開が現在起こっている。宇野理論の再検討が試みられるのは当然といってよい。私も再検討しているが、「純粋資本主義論は誤りである」、「原理論が段階論から分断されている」あるいは「次の社会は社会主義であるという目的論的な歴史観であり誤りである」、というような再構築には賛成できない。

(与えられた 10 分ではその理由を十分に述べることは無理なので、以下、少し詳しく説明を書いておきます。当日はこの中の一部を述べることになります)

1

私は現状分析家ではないが、現状について次のように見ている。価値法則による規制がますます効かなくなって、一面では、資本主義の市場経済化が促進され、市場経済による労働生産過程への収奪がますます強化されつつある。他面では、凶暴化した市場経済の収奪にたいする労働生産過程を基礎とする懸命な対抗運動も強化されつつある。両者の攻防は、時期・地域により一進一退を繰り返しながら、最終的には労働生産過程の意識的な社会的規制による市場経済のコントロールへと向かうだろう。ただしそれに成功するかどうかは、人間の主体的な実践にかかるといえる。この過程は、市場経済の生産過程への侵食が強化されていった資本主義の発生期を、いわば裏返ししているような一面がある。最近の「儲かりさえすれば何でもやる」という産業資本の商人資本化、金融資本の高利貸資本化(ヘッジファンド)、にもそれが示されている。

原理論が論証するように、価値法則が貫徹しているかぎり、労働生産過程は、無政府的な市場経済をとおしても、再生産が確保され、資本の価値増殖は労働過程を一定の節度を持って「搾取」することによって成立する。けっして野放図に生産過程や生活を収奪し破壊することはない。資本主義は、市場経済と労働生産過程とのバランスを、法則を通して維持しうる能力(ただし周期的恐慌を経ながら)をもっている。(自由主義段階の産業資本は、原理論のそれと区別されねばならないが、以上のような傾向を基本的に保持していた)。現在はこのバランスがますます失われ市場経済が凶暴化しつつある。だから市場経済の拡張をもって、「資本主義への逆流」とか「純粋資本主義への回帰」とか見るのは、市場経済と資本主義の相違を見失った見方である。この相違も、原理論によって初めて解明される。現代資本主義の理解に原理論が欠かせないのは、このような歴史観の基準は原理論しか提供できないからである。

2

宇野の「原理論は純粋資本主義を対象とした論理体系で、その正しさは論証をもってしかなされえず、実証によるのではない」という主張は、社会理論の中では確かに特異で独断的に見える。これを解明しようと、その形成過程を宇野の日本資本主義との対峙過程から説明しようとするのは、理解の一つの方法ではある。大黒氏はこれを試みている。最近出たバーシェイ『近代日本の社会科学』も同様なアプローチをしている。しかし両者には次の点が決定的に欠けている。原理論＝純粋資本主義論という考えは、イギリス資本主義の発展を対象にして形成された古典経済学、さらにその批判によって成立した『資本論』がすでに、たとえまだ不明確であれ、捉えていた論理である。宇野はそれを理論対象および論理構成において意識的に明確化したにすぎない。純粋資本主義論が宇野だけの独創物というなら、そのようなアプローチも有効であるが、後者への理解を欠いては、たんに日本の独特な一思想というにすぎなくなる。

古典経済学は、純粋資本主義を人間にとって自然な理想社会と誤解して理論を構築しようとした。彼らが最初に原理という語を使ったのはそのためである。マルクスはそれが特殊歴史的な社会であると見抜き、古典経済学の根本批判をして『資本論』を書いた。しかしその理論部分は、外国貿易、政府の干渉、小生産者を捨象した純粋の「資本家的生産様式」が専一的に支配する社会を想定することになっている。マルクスがそれを原理論と呼ばなかったのは、その語が一面では、当時古典経済学と硬く結びついていたからであろう。他面では純粋資本主義という概念が、彼の唯物史観と齟齬するのではないか、という配慮があったためではないだろうか。

ともかく宇野は古典経済学以来、イギリス資本主義の世界史的発展に依拠した原理論形成の脈を『資本論』の中に発見することにより、その純化、明確化、論理の再構成によって、原理論を創った。『資本論』には方法論の明示が欠けている。宇野が原理論・段階論・現状分析という方法論を明示できたのは、理論の対象を原理論＝純粋資本主義と明確化できたからではないか、と私は考えている。

原理論の否定は、自由貿易、自由競争の阻害が拡大し、国家の経済への介入が強化される帝国主義段階の到来によって、本格化する。ドイツ歴史学派と近代経済学(新古典派 Economics)がそれである。前者は、理論を否定し個別歴史分析を主張した。後者は逆に一般均衡の純粋数学理論を主張した。自由競争を想定しているから一見すると純粋資本主義論のように見えるが、原理論の核をなす価値法則を換骨奪胎した擬似原理論にほかならない。宇野は、純化傾向の逆転化が起こった帝国主義段階を考察することにより、それらとはまったく異なり、原理の論理体系の自立と完結、歴史段階論との区別という考えに到達することになった。『資本論』では純化傾向の発展が崩壊をもたらすかのような想定をもっていたが、帝国主義段階の到来は、その想定は原理論と段階論の同一視の誤りを提示した、と宇野は考えた。小幡氏はこの関係を、マルクスの「純粋化＝崩壊論にたいする(宇野の)不純化＝没落論」と言っているが、そのように単純化してよいだろうか。

純化傾向が逆転する段階の登場は、宇野にとっては資本主義が特殊歴史社会であることを、歴史的に実証したことを意味し、その特殊歴史性を論証する次元を原理論として区別できることになったのではないか。だから宇野の原理論は、まさに歴史段階論と区別される所に存在意義がある。「段階論から孤立した原理論」という考えは、原理論という概念自体を否定しているのに等しい。

『経済政策論』では、宇野は帝国主義段階を「爛熟期」と呼んでいる。没落期という語を宇野も使うことはあったが、私は宇野の帝国主義論は、帝国主義段階＝没落期説の否定という点で評価すべきではないか、と考えている。

大黒氏は、宇野の「方法模写説」を純化の逆転へも適用し、「逆転傾向が生み出した宇野理論の場合、原理を構成する論理の「純粋性」そのものにも、その経緯は「模写」されていなければならない」(5頁)と考えている。しかし宇野の方法模写説は、あくまでも原理論に限られる。「逆転傾向」は帝国主義段階論の出来事であり、それにも方法模写説を適用し、原理論にも「逆転傾向」が模写されるかのように考えるのは、まさに原理論への段階論の混入になってしまう。

現代における新生産力の発展は、資本主義の原理を阻害し、いわば不純化を一層促進することになっている。この傾向はけっして原理そのものの否定や減衰を意味しているのではなく、むしろ新生産力の原理への反発から起こっている、と私は考えている。マルクスや宇野が経験しない資本主義の新展開がありながら、原理に変化がないという考えは、原理論を「不易の経典」とする信仰（馬場氏）あるいはイデオロギー（小幡氏）のように、思われるかもしれない。確かに独断的で特異である。もし宇野が考えたような意味と異なって、経済学、哲学、政治学、社会学などの分野でそのような原理の主張がなされるのであれば、そういつてよい。しかし原理論の特異性は、資本主義自身がつ世界史上における特異性から来ている。資本主義の特殊歴史性は、原理論においてのみ論証できる。唯物史観は、その歴史性を直感的に捉えたビジョン（イデオロギー）にすぎない。だからそのように主張する人々は、宇野の原理論をイデオロギーレベルでしか捉えていないことになるだろう。

段階論についても、私は商人・産業・金融資本による三段階論を、現代資本主義を含んで改編する必要があるとは考えない。宇野の段階論は、たんなる歴史の発展区分論ではない。あくまでも原理論を基準とする発展段階論である。対象が第1次世界大戦までに限定されるのも、そのためである。それ以降の資本主義の展開を対象にしては、そこから段階論も原理論も抽出することは、不可能である。ということは、誤解されがちのように、それ以降の資本主義には、原理論も段階論も役に立たないということを意味しているわけではない。その現状分析に原理論と段階論の理解が間接的に有用であるのは、現代が新生産力と原理の対立を基底とする金融資本の変質化にあるからである。

現状分析は、もともと現状の中に問題を見つけ分析するものであるから、別に原理論を前提にしなくともなされうるし発展もできる。また原理論自身から現状分析の方法が直接出てくるわけではない。現状分析には、一定の仮説は欠かせない。それが事実で実証されるかどうか、でその仮説の正しが証明される。事実と違っていれば新しい仮説が作られる。このように仮説と検証の繰り返しを通じて、現状分析は発展してゆくことになる。このような仮説としての理論は、分析対象が変化すれば、それに応じて変化してゆくのは当然である。資本主義が変化したのに、「原理論が改編されないのはおかしい」という議論は、一面ではこの仮説としての理論

と原理論の混同から起こっている。現状分析に直接役立つツールとしての原理論という考えからすると、宇野の原理論支持が、信仰やイデオロギーに見えてしまうのも当然である。

原理論は、現状分析のための理論的仮説ではない。どのように詳細な歴史分析、現状分析によっても捉えられない資本主義の正体を論理的に明らかにするのが原理論の任務である。自然科学に疎いので恐縮であるが、説明のためのたとえを使わせていただきたい。自然科学では理論は仮説としてまず提起され、それが正しいかどうかは、実験によって実証される。正しければそれが理論となる。研究者による任意の仮説が許されるのも、実験による検証があとに控えているからである。また自然科学の成果が一般に応用可能なのも、仮説—実験という構造から成り立っているからである。しかし数学ではその正しさは論証によるのであって、実験によるのではない。だがそのような数学に対して、「形而上学である」、「観念論である」、「机上の空論である」という人はいない。それは、数学が理論—実験という関係では捉えられない、物質存在のある一面を論理として捉えているからではないだろうか。今なお宇野原理論に対して形而上学、観念論と呼ぶ人が多くいるが、私は、理論—実証の関係では捉えられない資本主義の本質を捉えようとしたものが原理論である、と考えている。

4

だが、私は宇野の原理論と段階論を「基本的に完成している」（降旗節雄、『マルクス理論の再構築』、241頁）という考えには異論をもっている。対象が純粹資本主義であり、三次元からなる論理構成をもち、価値法則は価値形成増殖過程で論証され、全体が方法模写説をもって展開される、という基本的な枠組みは完成しているといえる。しかし宇野がもっとも得意とした価値形態論も、価値実体の論証も未完成である。それらは原理論の核をなす価値法則に関わっているから、この点の究明は原理論全体の理解へかなり大きな変化をもたらさう、と考えている。このことは宇野の死後、価値法則と原理論の理解に関して宇野派の中に多くの異論が輩出したことにも示唆されている。

段階論についても三資本形態を基軸とする三段階の典型論という基本的な枠は完成している。しかしまだ政策、財政、金融、農業についての段階論が試みられたにすぎない。さらに労資関係、政治、法律、行政、社会運動など種々の面で試みられるべきではないだろうか。これらが充実してくると、経済学研究者以外においても原理論の意義が理解されてきて、「原理論は社会

科学の原理論でもなければならぬ」、「social sciences ではなくて統一された a social science でなければならぬ」という宇野の遠大な構想に近づくことになりうるだろう。現在はまだその道程の端緒にすぎない。

第1次世界大戦以降の現状分析においても、歴史解明である以上当然、分析と説明は一定の時期区分のもとになされることになる。しかしここでは段階論のような厳格な区分は成立しないだろう。研究者の関心に応じてさまざまな時期区分がなされ、名称が与えられても、それらが現状分析のなかの時期区分であり、新たな段階論をなすものではないことがはっきりしていれば、さしつかえない。第一次世界大戦以降を現状分析の次元とすることは、それ以降に成立するパックス・アメリカナを軽視ないし無視するものだという批判がある。しかし原理論・段階論はただパックス・ブリタニカの成立ということだけで生まれたわけではない。純化傾向という世界史上唯一の特殊歴史的事件をともなったことから、それは生まれてきている。(これがなかったら、またこれを認識することがなかったら、マルクスの天才をもってしても、『資本論』のようなモニュメントは生まれなかったに違いない)。また、パックス・アメリカナを現状分析の次元の対象とすることは、なんらアメリカ資本主義の現代史における決定的重要性を貶めることを意味しているわけではない。

馬場氏は今回、「小段階」として、「古典的帝国主義、大衆資本主義段階、グローバル資本主義段階」を提唱されている。氏がかつて主張された、「資本主義の歴史が生み出した諸企業形態の内、最高の生産力発展機構」としての日本の「会社主義」は、この中にどう位置づけられるのだろうか。

5

宇野は「原理論は、特殊歴史的な資本主義を対象にしているかぎりでは、論理的に完結できるし、それを完全に認識することもできる」と言った。この言に私は賛成するが、この言は宇野『原論』が完成しているということを意味しているわけではない。宇野原論はよく難解であると言われ、その理由は宇野の文章にあると解されている。しかし私は、それは根本的には資本主義という対象がもつ難解な構造から来ていると考えている。マルクスは「価値という概念は妖怪のように捉えがたい」と述懐しているが、資本主義の原理全体がまさにそうなのである。社会主義イデオロギーはこれを種々に単純化して理解し、資本主義の克服という展望をもった。資本家階級の

独裁体制という理解からは、プロレタリアの独裁という考えが生まれた。所有の私的性格と生産の社会性格の矛盾という理解からは、生産手段の国有化という考えが生まれた。戦争とか民族紛争とかの特別の政治状況のなかでは、このような誤った考えでもイデオロギーとして強力な大衆運動へと発展することがありうる。その勢いに乗じて資本主義を暴力的に破壊してしまうことも可能である。しかしその後社会主義体制を建設しようとしても、誤った認識にもとづくかぎり、早晚混迷に陥ってしまうことになる。

まだ原理論が完成できていないということは、そのアンチ・テーゼとしての社会主義も正確に提示できない、ということになる。それを展望するさいに根拠となるのは、『資本論』の労働過程(宇野はそれを再構成して労働生産過程とした)である。これは社会成立の一般的条件を人間と自然との関係において示したものである。資本主義はこれを価値法則をとおして実現していることによって世界史の一段階たりうることを、原理論が論証している。このことは逆に見ると、本来の労働生産過程を、価値法則の実体として、いわば陰としてしか実現しえていないという歴史的限界を意味している。この労働生産過程を、陰ではなくて、人間の主体的活動による現実として樹立する新しい社会が、原理論から展望することができる。これは目的論的な歴史観というのとは違う。原理論を否定して、資本主義は進化するものだというだけでは、資本主義の特殊歴史性は論証できないことになる。

先に述べたように、現代は価値法則の大きな毀損により、資本主義の凶暴な市場経済への変質が進展し、労働生産過程や生活への収奪と破壊が強化されつつある。他面では、それに対して労働生産過程や生活からの反発も強まっている。種々の社会運動(労働者保護、格差反対、自然環境保護、人権擁護、フェミニズム、人種差別反対、コミュニティーの復活、NPO活動など)が起こっている。まだ明確に意識されていないが、これらの運動は、労働生産過程の現実的自立化への胎動としてみるべきではないだろうか。

以上の考えから、私は宇野が明らかにしている原理論と段階論の基本的枠組みを否定して、原理論と段階論の再構築を試みる馬場氏やSGCIMEの『資本主義原理像の再構築』の諸研究にたいして危惧をもっている。企図は壮大だが、宇野の拓いた遠大な社会科学構想への途からそれて、迷路に入るおそれがないだろうか。